

王の劍士 五 「分岐点」

雅

園遊会とは——貴族諸侯の開く閑かな親睦会のの事である。

以上。

「以上、じゃありませんよ。何を纏めて終わらせようとしているんだか」  
呆れた声がかかり、レオアリスは諦め顔になって椅子の背もたれに身を投げ出した。

執務機の脇に立って先ほどの言葉を投げ掛けたのはこの場合当然、ロットバルトだ。

「こうした社交の必要性は以前ご説明したと思いますが……まだ説明不足でしたか？ 申し訳ない、ではもう一度」

「いや、充分です」

レオアリスが片手を上げて遮る。

「それは良かった」

ロットバルトはにこり、と笑みを作った。

今回レオアリスは、園遊会だか晩餐会だか茶会だか、とにかく六件目の行事から同じ日に出席を求められていた。単純に全て断りたいレオアリスとは違い、ロットバルトはあくまで社交という観点を重視している。

「舞踏会じゃなくて武闘会ならなあ」

「大惨事でしょう。補償の難しい話はしないで頂きたい」

「……前提がおかしいだろ。——全く」

反論してみてもこの分野では全くもって分が悪い、レオアリスは仕方

なく執務機の上の六枚の招待状達を睨んだ。

ディプロア伯爵の茶会。

コットーナ伯爵の園遊会。

エクシム商会園遊会。

舞踏会。

晩餐会。

舞踏会。

「優先度の高いものがどれか、お判りになりますね？」

ちなみに格式としては、茶会、園遊会、舞踏会、晩餐会と順に重くなつていく。当然、その優先度を問われている訳ではないだろう。

「……睡眠」

最近寝不足気味なレオアリスはつい本心を口にしたが、ロットバルトの秀麗な面に浮かんだ笑みを確認し視線を落とした。

（誰のせいだと思ってるんだ）

と思ったが、それは八つ当たりというものだ。春を前にしたこの時期、組織という所はやらと書類作成が多いのだ。ロットバルトはむしろ書類を減らしてくれている。ただ書類が経路的に全て彼の手を経て届くというだけで恨んではいけない。

それはともかく、ロットバルトは一通の封筒を取り上げ、レオアリスへ差し出した。コットーナ伯爵からの園遊会の招待状だった。

受け取って差出人の名を眺める。

「コットーナ伯爵？ 確かお会いした事はないだろう」

「ですが、貴方と全くの無縁ではありません。むしろ近い繋がりがあるとも言えます。招待主の繋がりがや立場で出席者を想定して選ぶというのも一つのやり方ですね」

「繋がり？ けど名前聞くのも初めて……あ」

思い出した。

コットーナ伯爵——正しくはエレノア・コットーナ伯爵夫人は、先代

アスタロト公、つまりアスタロトの母親の叔母であり、今のアスタロトが爵位を継ぐまでの後見人を務めていた人物だ。レオアリスも時折その名前をアスタロトから聞いていた。

『叔母上がいつつも貴婦人貴婦人で連呼するからさあ。貴婦人でだんだんおいしい食べ物みたいに思えてきちゃった』

と、妙な事を言っていた。

「あの・コトトナ伯爵夫人か」

あの、という響きには興味と、礼儀作法に厳しいというその夫人への僅かばかりの苦手意識も込められている。

「てことはアスタロトも来るかな」

「おそらく出席されるでしょうね」

「じゃあ大分マシか」

レオアリスの様子に文句が無さそうなのを見て、ロットバルトはその場の残りの封書を引き上げた。

「では、他の方々には欠席の返信をしておきます」

「ああ」

できれば全てに欠席の返信をして欲しいところだが、その言葉はぐつと飲み込む。それよりこの場合の重要な要素を確認していない。

「今回は他に誰か行くのか？」

その問いには非情な答えが返った。

「招待は上将お一人に宛てられています」

「――」

という事は、挨拶も何もかも全部一人でこなさなければならぬという事だ。

どよん、と頭上に暗雲を広げたレオアリスを見て、それまでやり取りを眺めていたヴィルトールが笑う。

「大丈夫ですよ、上将。ロットバルトにはそのどれも全部招待状が届い

てるでしょうから」

近衛師団中將に対してではなく、ヴェルナー侯爵家の子息に対してだが、どの立場に宛てられようと来た招待状に変わりはない。

「ああ、そうか、そうだよな」

それを聞いてレオアリスの表情が明るくなった。挨拶や会話をお任せしようという考えが見え見えだ。

「考えてみりや、お前は昔からこんな数の招待状が日々来てるんだろな。こんなんじや足りないか」

調子良くそう言って、レオアリスは招待状の白い封筒を指先でぐるりと回しつつ頬杖を付いた。ロットバルトが自分の机に残りの招待状を置きながら頷く。

「そうですね。毎日毎日良くもまあ飽きもせず……」

そこでロットバルトは口を閉じた。だがうっかり口にした言葉を既に聞き取っていたレオアリスは、頬杖を付いたまま口元に堪えきれない笑みを浮かべた。

「やっぱそう思うよなア」

「――そうですね」

肩を竦め、それから中庭への扉を開けて事務官のウインレットを呼ぶロットバルトの姿を横目に、レオアリスは取り敢えず機嫌良く署名をしたためた。

ロットバルトは署名を済ませた返書をウインレットに手渡してから、僅かに瞳を細めた。

「一人厄介な相手と重なる可能性が高いが……」

その人物のお陰で少しばかり場が荒れるかもしれない。

「どうせこの先避けて通れるものでもない、いいか」

「まあー！ これは近衛師団大将殿、このような場へお越しいただき光栄ですわ」

エレノア・コットーナ伯爵夫人は、ふくよかで朗らかな女性だった。アスタロトにとつては母のまた叔母に当たるからだろうか、アスタロトとは余り似てはいない。

白く肉付きの良い両手を優雅に動かし、下がり気味の目じりを更に細め、少し早口で、言葉を差し挟む暇も無いほど良く話した。

「いつもアスタロトから大将殿のお話は伺っておりますのよ。同い年の友人が本当に嬉しいようで、あの娘こったらこの館へ来るたびにいつもそのお話ですわ。お陰でわたくしも、お目にかかったことがないくせに、王の剣士という存在が非常に身近に感じられておりましたの。今日お会いできて本当に嬉しく思っておりますわ。本当にまあ凜凜しいお姿。さあどうぞ庭園においでくださいませ。今日は若い方の集まりでもありませんし、話題の方がお越しとあつていらしているご令嬢達もとても喜んでいらつしやるようですわ。せっかくおいで頂いたのでありますもの、どうぞごゆっくり、色々な方々とお話をなさつていってくださいませ。それにしても貴方とヴェルナー様が一緒にいらしては、他の男性達は今日は一日寂しい思いをされるのではないかしら、ほほほ。あらでも、他の方々も大将殿のお話を聞きたがつていらして、それもあまり気にならないかも知れませんわね。そうそう、アスタロトも既に参っておりますのよ。今は挨拶に出ておりますけれど、落ち着かれたらあの娘こともゆっくりお話をして差し上げてくださいませ」

ひとしきり歓待の意を示した後、エレノアは優雅にお辞儀をして、また新たに到着した来客の元へと両手を広げて近付いていった。

レオアリスがその間に発したのは招かれた事への謝辞だけだ。

去り際にコットーナ伯爵が「失礼した」と二人にしか聞こえないほどの声で素早く言い残して行つたのが、今日一番的印象的な場面になるかもしれない。

「……………すごかつたな」

ひそりと感想を洩らした。

早くも精神力が削られているレオアリスに対して、ロットバルトは平然としたものだ。

「ご婦人は会話を楽しむ事に長けていますからね」

「会話か…………」

レオアリスは広間を見回した。

横に長く天井も高く広々としていて、ちょうど正午を過ぎたこの時間は明るい陽射しに満ちている。舞踏会を開催する時はここが会場になるのだろう。

正面の壁には庭園へ続く硝子戸が八組も設けられ、今は庭園へと開かれていた。四角く切り取られた緑の庭園は、一層明るい陽射しに照らされて緑の色も鮮やかだ。

来客達はまずこの広間で主であるコットーナ伯爵夫妻に挨拶をしてから庭園へと流れていく。

レオアリス達もまた、庭園へ足を向けた。周囲の眼が自然と二人の姿を追うのは王の剣士とヴェルナーという要素もあるが、やはり軍人ならではの、貴族達の優雅さとは少し違う、その場の空気を引き締めるような立ち居振る舞いのせいもあるだろう。

「まあお元氣そうなのは何より——。…………ちよつとアスタロトの気持ちかが判つたな」

あの勢いで貴婦人、貴婦人と言われたら、アスタロトが次第に美味しい食べ物に思えてきた、と言つた心境も判る気がする。

ロットバルトはレオアリスの様子に含みのある笑みを浮かべ、視線を

庭園に向けた。開かれた扉を出ると、広間から続く露台になっていて、その幅と同じ白い石を張った十段ほどの階段が庭園へ降りている。

「あそこまでの能力が必要とは言いませんが、あの十分の一でも持ち合わせていれば楽でしょうね」

何の、と聞くまでもなく、庭園に集う人々を見れば判る。全員とはいかないまでも、失礼の無いように挨拶を交えるには、かなりの気力を要するだろう。

「華やかな会話は生来女性の得意な分野でしょうが、我々男は努力が必要です」

「……努力か。大変なんだな、皆」

レオアリスはしみじみ呟いた。先ほどのコットーナ伯爵とか。

「女性の方が社交の能力に長けている。こうした場に夫妻での出席や女性を伴って出席するのは仕来りしきたりですが、その理由が判る気がしますよ」

庭園は館の南側に広がり、まだ時折雪の降るこの季節でありながら小春日和の柔らかい日差しが降り注いで気持ち良かった。

着飾った招待客達が料理の並べられた円卓や緑の中に置かれた椅子に集い、楽しげに語り合っている。

平穏さを感じさせる光景だった。ただしその間を抜けるのは、それなりの苦心と時間を伴ったが。

「レオアリス！ こっちこっち！」

手を上げなくてもすぐにそれと判る。アスタロトの周りに漂う空気はひどく華やかだ。それには周囲を取り巻く青年達の熱意に満ちた様子も影響しているかもしれない。

アスタロトの装いもまた見事だった。先月の新年の祝賀では正規軍の正装とあって軍服姿だったが、今日は冬のさなかに春を思わせるような、

淡く裾に向かうに従って色の変化を付けた藤色の盛装を纏っている。藤の花の房を模した耳飾りと、同じ意匠の腰帯。

レオアリスは束の間、足を止めた。

何だかんだと言った所で、アスタロトにはこうした華やかに着飾った場所が良く似合った。

アスタロトは取り巻いていた青年達の傍を離れると、レオアリス達へと歩いてきた。青年達の名残惜しそうな視線が追っている。というよりは、恨めしげな視線は、場を邪魔したレオアリスに向けられたものだ。

「いいのか、話の途中じゃ」

さすがにレオアリスも居たたまれない気持ちになったが、アスタロトは気にした様子もない。

「いいの。挨拶はもう終わったのに、何か知らないけど皆ずっといるんだもん。抜け出すきっかけがなくてさ。あ、ロットバルト、来てくれて嬉しいよ」

アスタロトはにこにここと、いつにない明るい笑みを向けた。ロットバルトが瞳を細める。

「——何かありましたか」

「警戒すんなってー。たださっき、お前を紹介してくれて何人かから頼まれてさ。後で話くらいしてあげてよ」

「意外な事をされる」

「だって挨拶するとき、皆言うんだもん。私に言ったってしょうがないとは思うんだけど、皆真剣な顔するから。あ、あくまでも本人が言った場合だよ。親とかに言われてもそれは取り合わないから」

ロットバルトは曖昧に頷いてみせた。アスタロトが念を押す。

「よろしくね、話だけでもいいから。皆ほんと可愛いよ」

こうした場所での挨拶がてら、相手の交流のある人物の紹介を頼むのは良くある事だ。

けれど、今まで取り持つ事など全く頭になかったアスタロトが、そう

した少女達の想いに親身になったのは、ただ彼女達が熱心だったからだけではないだろう。

アスタロト自身、まだ気付いていない気持ちだがそれを後押ししていた。

しかし取り敢えず、アスタロトは約束した少女達への義理を果たし、それからレオアリスへひよいと顔を近づけて口元を片手で覆い、小声で囁いた。

「エレノア叔母はどうだった？ もう挨拶したるぞ？」

「どうって……、明るくて優しくそんな感じだったかな」

さすがに正直な感想を言う訳にはいかない。何を期待していたのか、アスタロトは少しがっかりしたように首を捻った。

「そお？ おかしいなあ。今日もさあ、着いた早々服の裾の持ち上げ方から扇の持ち方まであれこれ貴婦人らしくしろって何度も言われてさあ。叔母上に会ったらお前にもあの気持ち判るかと思っただのに」

「まさか俺にそれを言う訳無いだろう」

「ちえ、まあいいや。それより、挨拶ばつかで疲れない？」

レオアリスもアスタロトもそれぞれ、主のコットーナ伯爵夫妻に挨拶をしてから、およそ一刻ばかりは延々と来客達との挨拶に追われていた。

「疲れた。改めて思ったけど、一種の仕事みたいなものだよな、これ」

「そう、挨拶なんてつまんないよね！ だがお楽しみはこれからだ！」

アスタロトが妙なノリになってきた。

「私が先輩としてお前に園遊会の真の楽しみ方を教えてやろう」

アスタロトは胸を張り、きりりと眼差しを上げて庭に点在する料理の置かれた卓を見渡した。

「まずは探す」

「はあ？」

「重要なのは選択だ。選ぶ卓、料理、種類……置かれてるのは全て一律じゃないんだ。だから必ずまず確認しなくちゃいけない。自分の好みの料理がいかにあるか、充分な量と品数か、周囲に敵はいないか。これを

誤ればその後数日間後悔する事になる！」

「何日後悔する気だ。大体他を食べれば済むだろ？ 充分過ぎるくらいあるじゃねえか」

「いいやつ！ お前はまだこの恐ろしさを知らん！ 何てったって私は貴婦人」

(そうか？)

という突っ込みを心の中だけで堪えたレオアリスは賢明だ。

「卓の間をうろちよるするのは作法に反するからな！」

アスタロトはびし、と指を突き付けた。

「卓一つ食い尽くすのはいいのか？」

何かが、根本的に間違っている。何とははっきり指摘したくないが。

「何？」

「いいや」

「じゃ、ほら、よく探して。気取られるなよ。あくまでさり気なく、会話とかしながら自然に卓に近付くんのだ」

何の作戦行動だ……、と口の中で呟く。アスタロトはじろりとレオアリスを睨んだ。

「返事は？」

「はいはい」

「気合い入って無いし！」

「あー」

「ロットバルトも！」

「——」

ロットバルトは一呼吸の間、視線を逃した。が

「私はそろそろ、退席させていただきます。一通りの挨拶は済みましたしね。上将、このあとは寛いでいただければ結構です」

にこりと笑ってその場を離れようとしたロットバルトの外套を、レオ

アリスが引き止めるよりも早く、アスタロトの手が掴んだ。

「待てよ、まだやる事あるじゃん。私が言った事もう忘れたの？」

律儀にも、娘達との紹介の約束の事かと思いきや、違った。

「帰る前に探して行け。お前背が高いから良く見えるだろ？ お菓子がいっぱいあるトコロがいいナ」

「……」

「あ、何その嫌そうな顔、失礼っ」

「人んとこの参謀を妙な事に使うなよ、もったいねえ」

「何言ってるの、こういう事こそ協力しあわなきゃ」

会話の内容はともかく、三人が揃っている様子は端から見ればとても華やかな光景に映る。

少し遠巻きに、その会話の中に入りたいと願う何も知らない青年達や娘達が見つめていたが、その中の二人ばかりの青年がついに肚を決めて近付こうとした時だった。

一人の男が彼等の横をすつと追い越し、アスタロト達へ歩み寄った。せつかく話かけようとしていた青年達は非難の眼を向け——慌てて視線を逸らせた。

取り巻いていた来客達の間には緊張が流れる。そして多分に興味も、そこには含まれていない。

周囲の反応を意に返さず、男はさくりと冬芝を踏む音を鳴らした。

「これはこれは、社交会で今注目の顔ぶればかりが揃って、随分と楽しそうだ。貴重な場に私も加えて頂けるかな」

言葉の中身を裏切るような酷薄な響きの声がかかり、アスタロトはさつと身構えて振り返った。相手が誰だか、声だけで判る。

「ブラフォード」

「久しくお顔を拝見していなかったが、ご機嫌麗しゆう、アスタロト公」

長い黒髪を波打たせた、二十代半ばの背の高い男はそう言って、アスタロトとレオアリス達へ笑みを向けた。

今まで話しかけるために周囲を取り巻いていた他の客達は、遠慮がちに距離を置いていた。アスタロト達とはまた違った意味で、近付きがたい相手だったからだ。

四大公爵家の一角、東方公ベルゼバブの次男ブラフォード。

元々四大公爵家はこの国の貴族達の中で最高峰の地位にあり、普段から近寄り難い存在ではあるが、ベルゼバブ公爵家は一際その印象が強い。

実際、公爵自身が非常に冷酷な性格の持ち主で、ブラフォードも父親に良く似ていた。

今この場で親しみを以って積極的に話し掛けたと思う者はそう多くはなく、ブラフォードが挨拶をまともに受ける者は更に少ないだろう。

かつて、一時的に、本人の意思とは全く関係ない所で決められた事ではあったが、アスタロトの婚約者だった相手でもある。アスタロトとしては闇に葬り去りたい過去だ。

「——久しぶり、じゃあねっ」

くるりと背を向けようとしたが、さすがにそうは問屋が卸さない。

「つれないな、挨拶くらい受けて頂かなくては。こうした場の礼儀だろう、公爵」

「——」

アスタロトが眉をしかめる。ブラフォードはアスタロトの反応を笑い、それから彼女の前に片膝を着くと、恭しく右手を取って甲に口付けた。

「以前よりも一層美しくなったな、お前は」

賛辞は、正直に言えば聞き慣れている。大体がこうした場での決まり文句でもあるからだ。

けれど、この男の口から出ると、嫌がらせて言っているのではないかと勘繰ってしまう。

（ヤなヤツだし——）

取り戻そうとした右手を、ブラフォードの手が引き止めた。

「ちよ」

ブラフォードの瞳がアスタロトにじっと注がれる。そこにある意外な光に、アスタロトはふと息を呑んだ。

それまでのブラフォードとは確かに違う――

唐突に、アスタロトは背後の存在が堪らなく気になった。

この様子を、何故だか、見せたくなかった。

そう言えばレオアリスには、ブラフォードの事をどう話しただろう。

知っていたらどうか。

(べ、別に気にしなくていいんだけど)

視線を下げるとまだ膝をついたままのブラフォードと目が合い、ふと心の中を見抜かれたような気になって、慌てて手を振り解いた。

「はい、挨拶終わりっ」

「何も照れる事はない。長い付き合いだろう」

「照れてないっ！ もう用は済んだだろ、さっさと帰れ」

そう言いながら何故か後ろを振り向く事ができず、アスタロトは中途半端に顔を反らした。

「まだ全て済んではいない。そこのご友人方に挨拶をしなくてはな」

いつもの皮肉っぽい見知った様子に戻ると、ブラフォードは立ち上がり、悠然とした態度でレオアリスとロットバルトへ向かい合った。

「いらな――」

アスタロトが止める前に、ブラフォードは鷹揚に右手を差し出した。レオアリスへ。

「近衛師団第一大隊大將殿。噂はかねがね聞き及んでいたが、こうした場では初めてお目にかかる」

「こちらこそ、初めてお目にかかります」

レオアリスは差し出された手を握った。

「ただ、私も前から大將殿には興味を抱いていた」

ぐっと、ブラフォードの手に力が籠められる。口元の笑みを歪めた。

「大將殿は預かり知らぬ処かも知れないが、ご友人であるアスタロト公

は、かつてとは言え私の婚約者だった。あのままであれば今頃、私の妻として傍らに居ただろう。四年前か、君達がまだ出会う前の話だ。君が現れなければそれも少し違う結果になっていたのではないかと、時折考えるが――」

言葉の内容にアスタロトは驚いてブラフォードを睨んだ。

「ちょ……ふざけるのは止めるよ！ もう行こう、レオアリス、構うことないよ」

アスタロトはレオアリスの袖を引いたが、レオアリスはちらりと視線を向けたものの、すぐ済むというようにアスタロトの手を下ろさせた。

改めてブラフォードと向き合う。

その表情に、アスタロトはどこことなく違和感を覚えてレオアリスの横顔を見つめた。

「そのお話は聞いています。ただ、アスタロト公は自分の意思ではない婚姻を嫌って飛び出したんです。俺に会う以前に意志が固まっていたと思います」

ブラフォードの言葉は挑発を含んだものだったが、レオアリスの返しも充分、挑発と取れる言葉だ。アスタロトが傍らで不安そうな顔をしたが、止めるきっかけが掴めずにいる。

「私との婚姻を嫌がって、と？」

ブラフォードは低い囁きと共に口の端を吊り上げた。その顔を、レオアリスは真っ直ぐ見据えた。

「自由意志の無い取り決めに嫌がって、です。しかし取り敢えず、誰にとつてもあまり面白くも無い話題を敢えて出すのは止めませんか」

何となく、違和感の理由が判って、アスタロトはまた息を飲み込んだ。

はつきりと口に出している訳ではないが、レオアリスは、怒っているようなのだ。普段の彼らしくない少しきつい口調。

どくん、と心臓が鳴る。

(怒ってるって――、何に?)

多分、アスタロトがその話題を嫌がっているのを、判っていて——だから。

(それだけ)

そう、それだけだ。

ブラフォードはレオアリスとアスタロトの顔を眺め、喉の奥で笑いを転がせた。

「——単なる挨拶代わりの昔話だったが、確かにこれで止めておいた方が無難のようだ。王の剣士を怒らせてもいい事はない。穏やかな質と聞いているが、さすがに友人の事には敏感と見える」

ブラフォードとレオアリスの瞳の色は漆黒、だが違う色に感じられるほどそれぞれ対照的な光を宿している。

「それは、誰でもそうでしょう。俺も弁え<sup>わきま</sup>ず失礼な事を申し上げました  
が」

ブラフォードは何が可笑しかったのか、また笑った。

「構わん。少し気が急いだのだ、私も。アスタロト公はあの頃よりも美しく成長したからな。まだこれから更に美しくなるだろう」

「——」

「……ちよつと、そこは頷くトコだろ」

アスタロトがぶくりと頬を膨らませ、黙っているレオアリスの肩をつつく。ブラフォードはにやりと笑い、それからまだ握ったままだった右手を離す代わりに、左手を包み込むように重ねた。

「尤も私としては、大将殿自身にも興味がある」

「俺自身の事なんて面白くはないと思いますが」

「いいや、非常に興味深い。過去の事は水に流して、二人で一晩ゆっくり語り合いたいものだ」

「ああ、それなら……」

アスタロトは社交会では有名なこの男の趣味を思い出した。要はどこでもいいのだ、この男は。

「ちよ、ちよつとレオアリス、こっちこっち」

「ん？」

レオアリスの手を掴みブラフォードから離れ、アスタロトは素早くロットバルトの背後に回ると、ふうつと息を吐きつつロットバルトの背中をぽんと叩いてブラフォードを示した。

「どうぞ」

「——」

ロットバルトはアスタロトの様子を眺め、軽い溜息をついたものの、アスタロト達に代わってブラフォードに向き直った。あくまで礼儀を保つたにこやかな笑みを返す。

「さすがブラフォード殿、多彩な趣味をお持ちで羨ましい。ですが冗談を仰るのは余り得意では無いようですね」

(ロットバルト、カッコイー！)

いっそ殺つてしまえ！ と拳を握る。

アスタロトの過激な声援は背中できき流し、ロットバルトは穏やかに続けた。

口調だけは。

「こうした場でどのような話題を提供するかは、ある意味で場を和ませる為の個々の能力次第ですが……先ほどから伺っていると今日はどうも失敗が続いておいでのようだ。せっかく用意された話題とは思いますが、屋敷に戻られてもう一度良く推敲されては。と言っても推敲した上で次に同じ話題が出せるとは、私には思えません」

「ヴェルナー。久しいな。相変わらず口の達者な事だ、変わりなくて何よりというところか？」



「アナスタシア……いえ、アスタロト様、貴婦人がそのような声をあげるものでは」

「んな事どうでもい……ていうか……え、何ソレえ!!??」

エレノアはこほん一つ咳払いをして辺りを見回し、その場を仕切り直そうとアスタロトを隣の小部屋へ連れ出した。

「ですから、三年前はまだ公爵家を継承したばかりで不安定な時期でもあったから、婚姻は先に延ばそうと」

「……そんなの、聞いてな」

「ご説明しますよ、すっかり忘れてしまったの？ また数年後、あなたの周囲が落ち着いて来たら改めてお話をしようという事になったのじゃないですか」

「——」

それが延期という話になるのだろうか。

「もちろん、ブラフオード様に限る訳ではないですよ。あなたのお気に召した方が一番。ヴェルナー侯爵家のロットバルト様も以前よりも増して素敵な青年になられたし」

「いや、それはマジ有り得ないから！」

アスタロトは素早く否定した。何故エレノアは常にあの二人が第一候補なのか。

「あんなご立派な方を……変な娘ねえ」

(変なのは叔母上だっ)

アスタロトは口をばくばくと開け閉めした。

「そうでなければ、ランスデール侯爵の御三男も丁度良いお年ですよ。たしか同じ十七歳だったかしら……ちよつとお若いかしらね。もうお一人、ベロン伯爵家のフアヌエル様も今二十二歳でしょう。それと今、正規軍の大将殿でアルノー様も若手の有望株よね、あなたには部下という事になるけど——それはやはりお嫌かしら。そうしたら、商家ではある

けれど、王都で一番手広く事業をされているメヴィナ家などは——あのお宅は一代で財をなしたやり手だし」

「叔母上……叔母上！」

延々と続きそうなエレノアの言葉を漸く遮り、アスタロトは肩で息をしつつ、大叔母を見据えた。

「——あのさ」

「どうかしましたか？」

「いや……その」

エレノアの興味を変えさせない限り、この攻勢は止まる所を知らない。アスタロトは何とかこの状況から逃れる術を探した。

「あ、そうだ。——叔母上、それ一覧表にしてよ。今度見ておくから！」

「まあ、そう？ あなたも真剣に考える気になったのかしら」

エレノアは少し嬉しそうに白い手を頬に当てた。

「考える考える、じゃ、またね」

逃げた。もとい、アスタロトはエレノアの傍からそそくさと離れた。

足取りに彼女の憤慨振りが現れている。

(全く、いい加減信じらんない！ 結婚なんてまだ全然する気ないって言ってるのに。大体良くあれだけ相応しい相手だのを把握してるよ、単なる趣味なんじゃないの?)

そこまで考えて、ふと気が付いた。ぴたりと足が止まる

(あれ——)

エレノアは、アスタロトの婚姻相手に相応しいと彼女が考える相手を並べていた。その中で、名前の挙がっていない存在がいる。

エレノアの話の聞いている限りは、相応しい地位にありさえすれば相手が貴族でなければいけないと考えている訳でもないし、そもそもエレノアの言う相応しい地位というのであれば、申し分ない地位にいるはずなのに。

だからこそ、エレノアだって今日招待したのではないのか。

（――何で）

はっとして首を振った。

別にいい……。そんな風に考える相手じゃ無くたって、それはいい。

というよりは、今の状態が一番居心地がいいから、そんな感情を差し挟みたく、ない。

だから別に――。

（いいんだ、叔母上が名前出さなくて良かった！ それよりも、あの凶悪な現場を何とかしなくちゃ）

もやもやとした気持ちを飲み込み、アスタロトは再びレオアリス達の所へ向かう為到庭園に出た。

コットーナ伯爵はアスタロトが去って行くのを見送って妻の傍らに寄り、溜息混じりの言葉を掛けた。

「何だね、お前はこんな場所。公爵も困っておいでだったろう」

「まああなた、聞いておいででしたの。でも大切な事じゃありませんか、アナスタシアももう十八になるんですよ、お相手選びを早く進めなくては、ゆっくりしている時間はないのですもの」

「それはそうだが……ご自身のお気持ちもあるのじゃないか。まだご結婚など考えてはおられないようだし」

生来が穏やかで気遣いの多いコットーナ伯爵は思案げにアスタロトが向かった庭へ視線を投げた。

気に掛かっているのは、今日のアスタロトの様子だ。園遊会にあの近衛師団の大将が来ると聞いてから、アスタロトはいつもより気持ちが弾んでいたようだ。コットーナ伯爵にも、衣装がおかしくないだろうかと、珍しくそんな事を尋ねていた。

ようやく年頃の娘らしくなってきたのかと、ただ微笑まじさを覚えた

ものだが。

「公爵は、お心に止めているお相手がいるのではないのかね」

エレノアは女性特有の勘の良さで、伯爵の先回りをして眉を寄せた。

「アナスタシアが彼を気に入っているのは判ります。でも、あの二人では結局ご縁がないでしょう。大将殿もいずれ近衛師団を」

「滅多な事を言うものじゃない」

コットーナ伯爵は妻を嗜め、周囲を見回した。幸い来客の流れも落ち着き、小部屋の入り口付近には誰もいない。

それでも、こんな場所で口にする話ではない。

「とにかく、まだ公爵もお若いのだし、もう少し時間を持ってもいいのじゃないかね。我々が一番、あの方を気遣って差し上げなければいけないのだし」

「たがらこそ早い方がいいですよ、それがアナスタシアのためなんですから。あなたはアナスタシアが辛い思いをしてもいいと仰るの？」

「そういう訳ではないが――」

エレノアは仕方なさそうに首を振った。

「男の方はこれだから……どうせ言わなくてはいけない事なのだから、思いが募ってから諦めるなんて、そんな事を言う方がずっと酷ですよ」

アスタロトは庭園に出て、レオアリス達のいた場所へ戻ろうとして、横から腕を引かれた。

振り返って、眉を思いつきりしかめる。

「ブラフォード」

振り解こうとした腕を、ブラフォードの声押し止める。

「少しくらい、話をしてくれてもいいだろう？」

いつになく、柔らかに頼むような口調だったから、つい足を止めた。

「――」

アスタロトの手を取り、ブラフォードは彼女を庭園を望む露台の一つに誘<sup>いざな</sup>うと、置かれていた白い瀟洒な卓の椅子を勧めた。

アスタロトは一度庭園へ視線を投げ、レオアリスの姿を探せないままそれを戻し、椅子に腰を下ろした。

「何。私も忙しいんだけど」

怒ったような口調に、ブラフォードが笑う。

「昔は時折、こうして話をしていただけだろう」

「あー、そうだよ。お前は昔からヤツだったケド」

「ははは」

幼なじみと言えば、幼なじみなのだ。ブラフォードとは。これほど爽やかな思い出の無い幼なじみも珍しいが。

「相変わらずヤツだよ」

「お前も相変わらず、口説き甲斐の無い女だが」

「そんな事いつしたっけ」

「せっせと贈り物を届けているだろう。せっかくの装飾品も服も見向きもせず、菓子程度しかお気に召さないようだがな」

アスタロトはつんと顎を反らせた。

「お菓子に罪はないし。でもお前から貰った服はちよつと」

「クク。ならば今後は菓子ばかり贈るようにしよう。体型を崩すなよ」

悔しいが、ブラフォードの方がずっと余裕がある。アスタロトは早く話を終わらせようと、語気を強めた。

「それで、何」

「何とは性急だ。急いでは礼儀に反するのだがな。まあお前に対してはその方が有効かも知れないが」

「だからさ、何の？」

「だから口説こうというのだろう。三年前の婚姻の件を、改めて」

「――今さら、何言ってるの？」

つい先ほどエレノアから聞いていたから、アスタロトは驚きはしなかった。ブラフォードはアスタロトが驚く事を織り込み済みだったのか、意外そうな光を瞳に宿したが、すぐに笑った。

「心積もりはそれなりに出来ているのか？ いい傾向だ。三年前、私は努力を怠っていたから。もう一度、今度こそ真剣に口説こうと思ってる」

じつと向けられた瞳は、突き放す気持ちが鈍りそうなほど、それまでのブラフォードとは違う色をしていた。

「――」

アスタロトは椅子の上で背筋を伸ばし、ブラフォードを見つめた。言うべき言葉は変わらないが、自分でも少し口調が弱い気がする。

「私はまだ結婚なんてしないよ。するつもりもない」

それはブラフォードには大して痛手を与えなかったようだ。

「いざれ必要だ。アスタロト公爵家の当主として、避けては通れん」

ブラフォードの言葉が胸の奥に重しを投げる。

『アスタロト』

判っているつもりでも、未だに重い名前だ。

「炎帝公――、当主の証である炎を有するお前は、次代にそれを繋ぐね」

ばならん。婚姻して子を成す事は、謂わば家系の存続の為の義務だからな」

「——判ってるよ。でも、相手はお前じゃないけど」

きつぱりと言って立ち上がり掛けたアスタロトを、ブラフォードの言葉が追い掛ける。

「想い甲斐の無い相手を想ってどうする」

ふっとアスタロトは息を止めた。

ブラフォードの言葉はアスタロト自身がまだ意識していない——無意識に押し込めようとしている感情を拾い出し、彼女の意識の上にはほとりと置いた。

「……何のこと」

考えたくない、とちらりと思う。

アスタロトは知らず、その感情を再び沈めようとした。

それを考えたら、何かが壊れてしまいそうで。

だがそんな複雑な感覚を慮るつもりは、ブラフォードには無い。

「剣士など、想ってみても甲斐が無いぞ。お前と同じ所での想いなど抱くまい。元々がそういう種族だ」

「そんなんじゃないよっ」

そんな事じゃあない。考えた事もない。考えちゃいけない。

「それは良かった。私にもまだ充分可能性があるという事だな」

「ないない」

アスタロトは頬杖をついてそっぽを向いた。

「大体お前は女より男が好みなんじゃないやなかったっけ」

「どちらでもいいが。女ではお前が一番好みだな」

「……そんな事言われて喜ぶ女がいるかっ！」

アスタロトの憤りは気にした様子もなく、ブラフォードは椅子の背も

たれに寄りかかった。

「お前の想いがまだ誰の上にも無いと聞いて安心したよ。今日の最大の収穫だ」

皮肉に近い口調だった。

「——無いよ」

「今後も、近衛師団の大将など止めておく事だ。お前とはどうにもならん」

アスタロトは堪らずブラフォードを睨み付けた。

「いい加減にしてよ！ お前がレオアリスを勝手に嫌ってるだけだろ！ 言っとくけど、三年前の事は、あいつには関係ないんだからな！」

「そんな事を本気で問題にしていると思っているのか。相変わらずまだ子供だな。三年前から少しも変わっていない」

ブラフォードは薄く笑った。自分の無知を嗤っているのだと、それだけは判る。

「じゃあ、何」

「言葉通りだ。お前達では成り立たないと言っている」

アスタロトはゆっくり溜息をついた。

「もし、レオアリスの過去の事を言ってるなら、今更……」

ブラフォードの嘲笑が深まる。

「お前こそ、まだそんな事を言っているのか？ それ以上に問題は大きいぞ」

その言い方に胸が冷えるのを感じ、アスタロトはブラフォードを見つめ直した。

少し前に、タウゼンも同じような事を言っていた。

「どういう、事？」

「まあ押し通す事もできなくはないが——無理だろう。特に彼は」

「だから、どういう事って」

「王はお前達二人をお認めにはなるまい」

「——王……？」

ブラフォードは笑みを浮かべている。

「何……、言ってるの、いきなり……」

唐突にとんでもない存在を目の前に突きつけられ、アスタロトは困惑

して瞳を瞬かせた。

王など、それこそ意識の外の存在だ。こんな話に関わってくる立場にはいない。

(ああ、でも)

伯爵位以上の貴族の婚姻には、王の許可があるのであったか。

「でも、何で」

王が、認めないなんて——。

何でそんな話になるのだ。

ブラフォードはアスタロトの戸惑いを面白そうに眺めた。

「私は十分に助言をした。後は自分で考えるんだな。考えれば誰を選ぶべきか、自ずと判る。——期待しているぞ」

最後の言葉はからかいまじりだったが、アスタロトはもうそれ以上聞く気になれず、席を立った。

逃げるように庭園に降りる。

丁寧に整えられた植え込みの間に敷かれた玉石を鳴らして歩く間にも、来客達はアスタロトに話し掛けようとしたが、浮かんでいる想い悩んだ表情を見て口を噤んだ。

先ほどのブラフォードの言葉が、ずっとアスタロトの頭の中に流れている。

『王はお前達二人をお認めにはなるまい』

(そんなの——)

関係ない。

鼓動が早い。

(そんなんじゃないもん)

そんな事は考えた事もないし、考える気もない。

レオアリスは、友人だ。一番大切な。

友人である事の方が、ずっとずっと重い。

(そうだ……)

こんな場所に生まれ色々なものが常に付きまとい、時折息苦しさを覚えたが、レオアリスの傍はいつも楽に呼吸できた。

アスタロトにとって、それはとても大切な事だった。

もし彼がいなかったら、多分自分は大きく違っていただろう。

今の状態を変える事など、考えられない。

(全然、関係ないよ——)

レオアリスが二つほど卓を挟んで、アスタロトに背中を向けて立っているのが見えた。

微かに胸を鳴らし、ただすぐにそれを安堵に置き換える。

ブラフォードの言った事など関係ないし、今までと、何も変わらない。

「レ……」

近寄る為に踏み出して少し視界が変わり、アスタロトはびたりと足を止めた。

少女が一人、彼の前に立っている。

確かアルマヴィーア伯爵の令嬢だ。アスタロトの二つほど年下で、つい先ほど挨拶をしたが、たおやかなとても可愛らしい少女だと思った。

レオアリスの顔は見えないが、少女は喜びと恥じらいを頬に乗せ、俯きがちに笑っている。

少女の抱く淡い好意が今日の小春日和の陽射しに相応しく、周囲に微笑みを浮かべさせるような光景だった。

その様子が何故か、アスタロトの心に束を刺した。

近付く事が躊躇われ、ただアスタロトはその場に立ち尽くした。

少女が何事か語り掛け、レオアリスの顔を見上げて口元を綻ほころばせる。ちくちくと、心の奥で刺が踊る。

(何を……)

話しているのだろう。

そのうち少女がアスタロトに気付いて、遠慮がちに頭を下げた。

レオアリスが振り返り、アスタロトを見つけて笑う。

「遅かったな」

鼓動が跳ねる。

それから、あの少女にも同じ笑みを向けていたのかと思ったら、ぎゅつと縮んだ。

でも、別におかしな事じゃない。誰かと話をしていて、笑ったって――。

アスタロトが傍に行く前に、少女は丁寧にお辞儀をして立ち去った。

「今の娘」

口にしかけて、何を聞いたらいいのか判らなくなった。

どうしたの、とか、何を話してたの、ではヘンだ。

「……ロットバルトは帰ったの？」

レオアリスが一人でいるなんて、珍しいと思ったから、そう聞いた。

「いや、まだいるよ、そこに」

レオアリスは苦笑を零し、少し先で五、六人の令嬢達に囲まれているロットバルトの姿を指差して見せた。

「あつという間に囲まれて、面白かったぜ」

「あ、私に頼んで来た娘たち皆いるじゃん、紹介する手間省けたな」

「へえ」

感心とも呆れとも付かない返事を返し、レオアリスは改めてアスタロトを見た。

「それにしても、戻って来てくれて良かったよ」

「そ、う？」

背が伸びた、と最近良く思う。

三年間で、同じくらいだった視線は少し視線を上げないと合わなくなった。

「邪魔しちゃったんじゃないの？ もっとゆっくり話をしてれば良かったのに。もし何だったら席外すけど」

何だか心と正反対の事を言っている。

「別に話す事が無いしな」

「――冷たくない？」

アスタロトは少しほっとしたのを取り繕う為に逆に素っ気ない口調になってしまったのだが、レオアリスは言い方が悪かったと思ったようだ。

「いや、女の子って周りにいないからな。挨拶交わしたらもう話題が無くてさ。それで終わりってのも礼儀に反するし、かといってまさか師団の話する訳にもいかねえし」

「――」

女の子。

「……へえ……そう。周りにいないんだ」

アスタロトはすつと俯いた。

「ごきげんようって、要はこんにちはって事だろ。貴婦人ってあんな軍よりも面倒な話し方しなくちゃいけねえのな。お前が苦手なものも判る……」

「――この、ばあーかッ!! 知らない!」

アスタロトは思いつきり舌を出し、くるりと背を向けて大股に歩き出した。

「アスタロト？」

レオアリスは驚いて呼び止めたものの、アスタロトは立ち止まる気配が無い。

周りはクスクスと笑っている。他愛ないケンカと思われるようだ。レオアリスは少し迷い、結局ただ息を吐いた。

「——最近、良く怒るな」

何故なのかと思いはしても、普段通りに話していたつもりでレオアリスにしてみれば、何がアスタロトの琴線に触れたのか今一つ判らず、そもそもアスタロト自身も自覚しきれしていない複雑な感情など、理解しろと言う方が無理かもしれない。

ちようどロットバルトが——こちらは女性達と卒なくお別れをして——レオアリスの前に立った。

「お帰りになりますか」

「ああ、疲れた。手合わせでもしたいな」

「付き合いますよ」

そう言うってから、ロットバルトはアスタロトが去った方へ視線を向けた。もうとつくに姿は見えないが。

「もう一度挨拶をしてからでなくても？」

怒らせた現場はしっかり見られていたようだ。

レオアリスは少し迷ったものの——、そこで別の選択をしてしまった。

「——いや、いい。何か怒らせたみたいだが、原因も判らずに謝っても余計火に油を注ぐだけだしな」

アスタロトならず、明日にはけろっとして現われるだろうと、レオアリスとしてはその程度の認識だった事もある。

幾つにも枝分かれた道は、後で振り返ってみても、どこで選ぶ場所を違えたのか判らない事が多い。

「帰ろうぜ」

ロットバルトは歩き出したレオアリスの様子を眺め、もう一度アスタ

ロトが消えた方に視線を投げてから、館へ足を向けた。

危惧は——ある。

だが第三者が言葉に出すには、今の段階では不確かだ。早急で——、余りに感情面に寄りすぎた話だ。

誰かがそれをしなければいいが、とロットバルトは思考の片隅で思ったが、彼ですらまた、幾つにも広がって伸びる道の先全てを想定することなどできはしない。

ひどく些細な、分かれた先はすぐに交わっているように思える、その程度の分岐点だった。

ルシファーは深夜の急な訪問者に瞳を丸くした。

それでも迷惑な様子もなくいつものように朗らかに笑って、扉の奥へと招き入れてくれた。ルシファーの後ろで灯りを落とした廊下は暗く、海の底のように青く濃い夜が横たわっている。

アスタロトは少し躊躇い、微かに吐息を落として玄関を潜った。主邸ではなく敷地内にある別邸で、彼女はそこを気に入って大抵はこの別邸にいた。

唯一廊下を照らす銀細工の燭台をほっそりした手に掲げている。ルシファーは必要以上に侍従達が控える事を好まず、こうした行為も自分でやってしまう事が多い。

だから、アスタロトは余計彼女に共感を覚えていたと言ってもいい。彼女が公爵の立場と自分自身とを両立させているのを見ると、力を貰える気がする。

先代——アスタロトの母の友人だったが、彼女は今のアスタロトにも好意を抱<sup>いだ</sup>いてくれている。

「どうしたの？ 急な相談？」

今も屈託なく、透明な笑顔をアスタロトへ向けた。からかうような、軽やかな口調が彼女の特徴だ。

「あんまり遅い時間に起きてたらお肌が悪いわよ」

「あ、ごめんなさい」

咄嗟に謝ったのは、彼女の休息の邪魔をしてしまったと思ったからだった。時計の針はもう深夜の十二刻を回っている。

「あら、私はいいのよ、夜が好きだから。でも貴方は若いしね？」

ルシファーはふわりと燭台の灯りを揺らめかせ、アスタロトに顔を寄せた。微かな花の香りが届く。小さな灯りに奇妙に大きく投影された黒

い影が壁の上で揺れる。

深い暁の色でありながら、透明な、風の色を思わせる瞳。果ての無い空。

「悩んだカオして」

アスタロトの瞳を覗き込む。

深紅の瞳に躊躇いと不安が浮かぶのを見て、ふふ、と微かに笑った。

「まあ座ってゆっくり話しましょう」

再びふわりと背を向け、柔らかな布地の衣装の裾を引き、短い廊下を歩くと折れ曲がった階段を上がった。

今は夜の闇でよく見えないが、壁や柱にもほとんど飾り気の無い、簡素な作りの館だ。

のどかで鄙びた農村にありそうな。

ルシファーは居間の扉を開け、アスタロトを先に入れた。

もう寝室にいたのだろう、居間は暖炉の火も落ちて冷え込んでいた。

「ごめんなさいね、今暖かくするから」

「いいよ、気にしない」

アスタロトはそう言ったが、ルシファーは暖炉へ首を巡らせ、ふうつと唇から息を吹き掛けた。

風が渦巻き、暖炉の中の薪が一本直立したと思うと、独楽のように回転を始める。

チツと小さな音を立てて火花が散り、夜の中に赤い小さな光が生まれると、すぐにパチパチと音を立てて薪に火が灯った。

炎はアスタロトの頬を柔らかく照らし出し、青い陰を少し払った。

「すごい……今どうやったの？」

「貴方の炎とは比べ物にならないけど」

いたずらっぽく笑う。

「でも消す時はもっと簡単よ。酸素を断っちゃえばいいから」

アスタロトは改めて感心した。火に関しては、他の四大公より抜きん

出ているつもりだが、それでもルシファーは苦もなく火を灯して見せた。  
風の王。

西方公はそうも呼ばれる。

風は炎に力を与える。

(だから、母さまも私も、ファーが好きなのかも)

アスタロトの様子を見つめ、ルシファーが微笑む。

「まあお座りなさいな」

アスタロトは籐を編んで作られたゆったりした椅子に腰掛けた。

座ると椅子はふわりと浮かび、床から少し離れて微かにゆらゆらと揺れた。

「揺り籠みたいでしょ。それとも海の中に浮かんでるみたいな感じかしら」

法术ではない。やはりこれも彼女の力だ。

「落ち着くのよ。切り離されて」

「え、何？」

周りを見回していたアスタロトは聞き返したが、ルシファーはまた柔らかな微笑みを浮かべた。

「紅茶が来たわ」

かちりと扉が開き、湯気の立つ紅茶の杯を載せた盆が漂うように入ってきた。人はいない。

今は彼女以外、この館には誰もいないのかもしれない。

「こんな事ばかりやってて身体を動かさないと、太っちゃうかしらね」

そう言いながらアスタロトに紅茶を注いだ杯を差し出し、自分も腰掛けた。

「さて、可愛いお嬢さんの悩みを聞こうかしら」

柔らかない、誘うような口調にほっと息を吐く。

昼からずっと、同じ事を考えていた。

気にしないようにして、——でもどうしても気になって、こんな時間

に訪ねて来てしまった。

彼女なら、答えてくれると思ったから。

「その——皆が言うから気になって」

「皆？ 何を？」

「皆って言っても、二人くらいなんだけど……」

タウゼンとブラフォード——いや、エレノアも、かもしれない。

「別に大したことじゃないんだ、——笑わない？」

「保証はできないわね」

ルシファーは唇を綻ばせた。

「う……」

「やあねえ、冗談よ」

この女性ひとは年齢不詳だ。見た目はアスタロトより十歳くらいしか上に見えないのだが、ずっと、永い間ずっと、西方公としてこの位置にいる。

ただ印象はアスタロトが幼い頃から変わらず、少女のようにも思える。風のような気ままさ。

「なあに？」

「え……と……、——例えば、ホントに例えばだけ……、正規軍将軍と、近衛師団総将って、結婚できないもの？」

ルシファーは美しい瞳を見張った。

「まあ、あなたアヴァロンと結婚したいの？ 渋い好みねえ。でもちよつと渋すぎやしない？」

「違ーう！ 私が言ってるのは……っ」

つい口にはかけて、アスタロトは慌てて口を覆った。鈴を振るような笑い声が弾ける。

「判ってるわよ、レオアリスでしょ」

はつきりと名前を出されてアスタロトの頬がさっと朱に染まる。

「ち、違つ、そんなんじゃ……でも皆言うからつ」

皆。いや、はっきりとそう言ったのはブラフォードだけだ。

「そんなこと、何で言うんだらうって……べ、別に私はそんなこと考えてないのに」

「何て？」

籐の揺り椅子から身を起こし、ルシファーは椅子の縁に両手を付いた。

「皆は何て言ってるの？」

問いかける言葉は柔らかい。心を解すほぐようだ。

「……できないって」

そう言って、アスタロトは息を吸い込んだ。

「——王が、認めないだらうって……」

口の中で消え入るような微かな声も、ルシファーには空気を伝つて届いたようだ。

「王が——、認めない？」

すうつとルシファーの纏う空気が冷えたような気がしたが、瞳を向けるとすぐにクスクスと喉の奥で転がる笑い声に変わった。

「そうねえ、もしかしたら」

ルシファーは再び椅子に深くもたれ、煌めく瞳でじつとアスタロトを見つめた。

「エアリディアル王女を降嫁させようと思つてたり？」

アスタロトは束の間言葉の意味を考えてから、驚いて顔を跳ね上げた。くらりと椅子が揺れる。

「そ——そんな話、あるの？」

夜の静けさの中で心臓が音を立てている。

関係ないのに。

エアリディアル王女の可憐な面が思い出され、鼓動はもつと早まった。優雅な立ち居振る舞いと言葉遣い。月の光を宿したような絹の髪に、

王妃と同じ淡い紫の瞳。

アスタロトより二つ下で今十五歳だが、聡明で優しく、アスタロトも彼女を好ましく思っている。

貴婦人という言葉が彼女ほど相応しい者はない。貴婦人など少しも似合わないアスタロトとは違つて。

昼の園遊会でレオアリスが伯爵令嬢と話をしていた姿が思い起こされる。とても絵になつていた。

多分それ以上に、良く似合うと思う。

それにファルシオンが、レオアリスを兄のように慕っている。

王がそう考えるのは当然のように思えてきた。

どんどん考えを巡らせているアスタロトの心の中を見透かしたのか、ルシファーはいたずらっぽく瞳を閃かせた。

「やあね、冗談よ。そんなにびっくりしないで。まあ有り得ない話じゃあないけど——、それよりも、貴方にそれを言った人が何を言いたかつたかは私も判るわね」

聞きたいのか聞きたくないのか、自分でも戸惑つた様子で椅子の中で身動いだアスタロトに、ルシファーはあっさり告げた。

「要は貴方がアスタロトで、彼が近衛師団だからよ」

アスタロトが唇を噛み締める。

「……どういう事？ それが一番、判らないよ」

ずつとそれを言われていて、例えば王がエアリディアルをと考えているならまだ判るが、それではどうしても納得がいかない。

ルシファーはアスタロトの様子を見つめ、軽く息を吐いた。

「まだ表立つて言える話じゃないから皆はつきり言わないのね。でもいずれはレオアリスがアヴァロンの後を継いで近衛師団総将に任ぜられるでしょう。そうなれば、近衛師団総将と正規軍総将の婚姻というのは、ちよつと有り得ないわね」

有り得ない。

「——」  
レオアリスが近衛師団総将になるだろうとは、アスタロトもそう思っ  
て——確信している。

皆が口に出さないのは、それが王の意志に依る事柄であり、王が明言  
しない限り言及を憚る事だからだ。

けれど、だからと言って、何故、ブラフォードが言った言葉に繋がる  
のだろう。

「——どうして……？　そ、そりゃ結婚とか、そんな事考えてる訳じゃ  
ないけど」

何故「アスタロト」ではいけないのか。

王が認めないのか——。

「うーん」

ルシファーは溜息をついて見せたが、本気で呆れている訳でもないよ  
うだ。

「まだ子供ねえ。——いい、常識的に考えてごらんなさい。近衛師団と  
正規軍、その最高責任者が婚姻を結べば、二つの軍事力が一極に集中す  
る事になるでしょう。単なる個人の婚姻とは違う。国として認められな  
いわ」

「——でも——、そんなつもりじゃなければ」

話が大き過ぎて、上手く飲み込めない。

軍事力の一極集中——

「そう考えるものよ、国はね。というよりは、そう考えられなくては、  
時に国を危うくする。何にしろ、容易く頷ける事じゃあないのは事実ね」

だから、王は認めない、と——そう言う事なのだ。

過去は払拭できるかもしれない。

けれど、今アスタロトが立つ場所、そしてこの先立つ場所は変えよう  
が無いものだ。

アスタロトはずっとアスタロトのまま、そうでなくなる事などできや

しない。

そしてレオアリスにとって、王布を纏う事は王の全面的信頼を得る事  
であり、彼という存在そのものにとって、最大の喜びだろう。

レオアリスが近衛師団総将に任ぜられる場合、アスタロトはそれを喜  
びこそすれ、止めさせたいなどとは全く思わない。

ブラフォードやタウゼンが言った言葉は正しい。

「アスタロト」だから。

炎帝公であり、正規軍將軍だから。

だから、認められない——

胸が心臓を掴まれたように痛む。鼓動が重く早い。

「貴方が、炎帝公じゃあなかったらね、多分全く違ったわ」

椅子の中に落ちた影に青く染められた姿で、ルシファーが憐れみを含  
んで囁く。青い大気に乗って、アスタロトの心に届く。

不安定にゆらゆらと、水面みなものように揺れる。

「それとも、彼の主が王でなかったら」

密やかな声なのは、それが成り立たない仮定だからか。

レオアリスの剣が王を選んだからこそ、レオアリスは今王都にいる。

「でも、主は必ず一人とは限らないんじゃないやなくて？」

「——」

ふっとアスタロトは肌が粟立つのを感じ、首を竦めた。

それ以上考えるのは、何故か、少し怖かった。

「いいんだ、そんなんじゃないから」

ルシファーはじつとアスタロトを見つめた。

「気持ちを隠したって意味がないわ。それは変えようがないものだから」  
アスタロトの心の中の葛藤を誘うように響く。ルシファーは密やかに  
微笑んでいる。

「……でも、本当にそんなんじゃないから」

「――そう？」

「帰るね、変な事聞いちゃってごめんなさい。ありがとう」

アスタロトは逃げ出すように籐の椅子から飛び降り、ルシファーに頭を下げた。

「送るわ」

「いいよ、大丈夫。おやすみなさい」

「そう？ おやすみなさい」

揺り椅子の中で、ルシファーは白い手を振った。

部屋を出ようと扉を開けた時、もう一度ルシファーの声のアスタロトを追った。

「でも多分、未来なんて変わるわ」

振り返った先のルシファーの微笑みに、アスタロトは何故だかぎこちなく笑い返した。

「時に思いもかけない変化をするものよ」

青い夜の影に沈んで柔らかく、密やかに微笑む。

「きつとね」

囁く言葉を残して、扉が閉ざされる。

自分で閉めたのかルシファーが閉じたのか、それも意識しないまま、アスタロトはしばらくの間ただじっとその扉を見つめていた。